

---

# 天に舞うは九つの尾っぽ

櫻塚森

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天に舞うは九つの尾っぽ

### 【Nコード】

N2859Z

### 【作者名】

櫻塚森

### 【あらすじ】

地獄堂霊界通信の二次創作です。

香月日輪先生の作品が大好きでとうとう手を出してしまいました。竜也兄ちゃんLOVEなため、竜也兄ちゃんの彼女を作ってしまった。いや、まだ彼女ではないですが。

原作の色を壊さないよう、文章などは参考にしながら書いていきたいと思っています。甘酸っぱい感じとちょいとエッチな感じが出したいなあと思ったり？

九尾の狐って知ってるかい？

その名の通り。尾っぽが九つに分かれています狐のことさ。

もちろん、尾っぽが分かれているなんて、普通じゃない。

力を秘めた動物は、長く生きる度にその尾が分かれていくんだ。

猫又ってやつも尾が分かれているだろう？

百年生きると2つに分かれる尾。

九つも尾が分かれているってことは、かなりの時を生きているってことで、それだけ力も強い。

そこまで生きてる狐は、神仏に帰依するか、闇に下るか。

どちらにしろ、この世のものではないんだよ。

くわばら、くわばら。

「祐介！祐介！」

いつもエレガントで優雅な美麗母ちゃんが椎名の住む高級マンションに駆け込んできた。

今日は、てっちゃんやリョーチンもいて、いつも優雅な美麗母ちゃんその様子に目を丸くした。

「どうしたんだ？母ちゃん。」

美麗母ちゃんは部屋に入るときゅっと彼を抱きしめ、その勢いでてっしやリョーチンをも抱きしめた。

美麗母ちゃんのいい香りにてっしとリョーチンはどきっと心臓が高鳴った。

やっぱり、自分たちの母ちゃんとは違うなあ。

「やっつと、やっつと決心してくれたの！雅ちゃんが！！」

心底嬉しそうな美麗母ちゃん言葉に椎名だけが目を見開いていた。

「雅姉ちゃんが、本当？」

「そうよ、やっとうちの子になってくれるって！」

てつしとリョーチンは顔を見合わせてチヨンチヨンと椎名の肩を突付いた。

美麗母ちゃんは、スキップしそうな勢いで部屋から出て行った。

「ミヤビ姉ちゃんって誰？」

そう尋ねたりョーチンは可愛く小首をかしげている。

彼の問いに椎名は珍しく興奮したような紅潮した顔で言った。

「雅姉ちゃんって言うのは、母ちゃんの妹の美鈴おばちゃんの子供。つまり、従妹さ。けど一昨年、おばさんとおじさんが事故で亡くなつて。母ちゃんは、雅姉ちゃんを引き取りたいって言ってたんだけど、色々あってさ、中々決まらなくて。」

「じゃあさ、椎名の姉ちゃんになるってことか？」

てつちゃんの言葉に椎名はにっこりと笑った。

つづく

## 2 (前書き)

人物紹介を兼ねてます。

万が一、地獄堂霊界通信を知らない方のために。

金森てつし。

小学校五年生。

最上級生を押さえて上院小学校の番をはっている。

頭は悪いが腕っ節と義理堅さは天下一品、皆の頼れる番長「上院のてつ」だ。

「向かいん家のリョーチン」こと新島良太。

てつしの幼馴染にして、右腕的存在。フワフワうさぎ頭の可愛い男の子。痩せっぽちのチビだが、その「足技」はてつしをも凌駕する。「一組の椎名」こと椎名祐介。

短気でバカなてつしを助ける軍師、参謀役。

常に冷静沈着、頭脳明晰、サラサラ黒髪、切れ長目の美少年だ。

この三人誰が呼んだか「町内イタズラ大王三人悪」その機動力と行動の突飛さで、集まれば、大人に取ってロクでもない悪戯を繰り返す。

しかし、ここ最近「三人悪」は連れ立っていても以前のように「イタズラ」を繰り返すことがなくなった。

それは、「地獄堂」との愛称で呼ばれる薬局に入り浸っているからである。

この「地獄堂」本来の名は「極楽堂」であるが、右に傾きかけた店構えや百歳とも噂される店主の風貌から、子供たちにとっては「恐怖のおつかいポイント」と呼ばれている。

かく言うてつしも幼稚園の頃ほど幼い頃は前を通るのさえ怖かったが、今は三人悪ともどもココに入り浸り、「地獄堂のおやじ」から見えるようで見えない、見えているようで見えない不思議の世界の存在を教えられ、その扉を開けてしまったのである。

時には、迷う靈魂を沈め、時には、人を救ってきた三人悪。

てつしは、不動明王、リョーチンが地蔵菩薩、椎名が文殊菩薩に守護されているのだ。

「叔母ちゃん達が生きていた頃は、よく遊んでたんだ。雅姉ちゃん  
は、なんて言うか、美人で、優しくてさ、裏表がないって言うか・  
・。」

少し照れたように語る椎名って言うのも珍しい。

てつしもリョーチンも“ああ、雅姉ちゃんって、椎名のお気に入り  
なんだな。”っと早々に悟ってしまった。

「けど、叔母ちゃん達が死んでしまつてからは、親戚中を転々とし  
ててさ、何回も母ちゃんは雅姉ちゃんにうちに来てって言ってたん  
だけど、何かしら理由をつけて断られていたんだ。」

「理由って?」

「よく知らない。母ちゃんは何回か手紙を貰つていたみたいだけど、  
あんまり連絡がつかないって嘆いてた。俺が小学校に上がる前から、  
この町には居なかつたみたいなんだ。」

小さい頃の椎名の写真。

アルバムを引っ張り出してきた彼は、一緒に映つてる雅姉ちゃんを  
指差した。

「ひょうーっ！可愛いつて言うか、美人な幼稚園児だ！」

リョーチンが思わず声を上げる。

「雅姉ちゃんは、叔母ちゃん似だからね、母ちゃんと叔母ちゃんは  
美人姉妹で有名だったんだ。」

中学生になつていよう、雅姉ちゃんの顔を思い浮かべてみる。

「祐介にも似てるよ。」

従妹だけ会つて、自分とよく似た風貌の美少女だと椎名は思った。

祖母ちゃんに義理立て通つていた幼稚園の帰り道、小学校に通う  
雅姉ちゃんもついでだからと麗母ちゃんをよく迎えに行つていた。  
けど、雅姉ちゃんはいつても決まつた場所にいなくて、いつも泥だら  
けだった。

綺麗なお嬢様って感じの雅姉ちゃんが泥だらけで現れることがしばしばあったから、美麗母ちゃんも叔母ちゃんも叔父ちゃんも「いじめ」かと大騒ぎしてたけど、雅姉ちゃんは静かに笑って「私の中の私が修行を求めているの。」って訳の分からないことを言ってたっけ。ふいに考え込んだ椎名にてつしリョーチンも首をかしげた。

「修行？」

あの当時は、雅姉ちゃんが何を言っていたのか、もひとつ理解していなかった。

美麗母ちゃんも叔母ちゃんも叔父ちゃんも雅姉ちゃんの様子を見守っていた。

泥だらけだった下校中の雅姉ちゃんはいつの間にか小綺麗になっていた。

「慣れてきたから。もう、大丈夫。」

そう言った雅姉ちゃんの写真に椎名は言い知れぬものを感じた。

「あの感じ……。」

あれは、何だったのだろうか。

ぞくりと何かが背中に走った。

一人考えの中に入っていた椎名の肩をリョーチンが叩く。

「椎名、何考えてるの？」

「一回、おれ、雅姉ちゃんが怖いって言うかそう感じたことがあったんだ。」

優しいとさつき言ったばかりの雅姉ちゃんのイメージがどうも定まらないでつしとリョーチン。

「雅姉ちゃんっておっかないのかよ。」

リョーチンがつしの言葉に嫌そうな顔をした。

「えっおっかない姉ちゃんっていやだなあ。」

リョーチンは自分の姉達の顔を思い浮かべているようだった。

4人兄弟の末っ子のリョーチンは今よりもっと幼い頃、兄や姉達の玩具だった。

「そう言う怖さじゃなかった。あれは……。」



台所から喜びの歌を歌っている美麗母ちゃんの声がする。

「会えば分かるんじゃないかねーの？兎に角、美麗母ちゃんは喜んでるし、めでたいことなんだよな。祐介も一人っ子じゃなくなるってことだ。」

新しい家族ができる。

「うん。」

別に一人っ子でも、兄弟が居ても彼のスタンスは変わらないだろう。きつと、シニカルな顔だけ天使の小学生のまま、てつし達とつるんでるんだ。

「美麗母ちゃんみたいに、素直に喜んでみるか。」

椎名にとつて、記憶の中の雅姉ちゃんはおしとやかじゃないけど、優しい姉ちゃんだ。

記憶力も頭もいい椎名は一抹の不安を感じながらも雅姉ちゃんに会えることを楽しみだと思えた。それは、自分以上に嬉しいとはしゃいでいる美麗母ちゃんや、めでたいと言ってくれてつしやリョーチンのお蔭だった。

つづく

### 3 (前書き)

よ、ようやく竜也兄を出せました。

てつしには、兄がいる。

名前を金森竜也。

酷い低血圧症で一日の半分以上は病人のようだが、その男気と腕っ節の強さは、さすがてつしの兄。

入学したての中学一年の時に絡んできた三年生をやっつけてしまっ

て以来、中学の事実上の番長となってしまうた。

けど、自分を引き連れてとか言うのではない。ただ静かに学生生活を送っているのだが、彼の持つカリスマ性が皆を惹きつけるのだ。

冷静沈着、容姿端麗。

竜也兄の弟であるてつしより、何処となく椎名に似ている彼は、三人悪の憧れでもある。

そんな竜也兄の趣味というか恒例なのが、真夜中の散歩。

深夜遅くに散歩をするのが、彼の生き抜きなのだ。

ひどい低血圧症の彼は、朝がめっぼう弱い。

本人も家族もそれを十分に理解しているが、少しでも早く寝て朝に備えるということは、彼の中にはない。

そして、少々神経質な毛のある竜也兄には誰も何も言わない。

家族が自分に気を使ってくれてるのは分かっているが、どうも治らない。

今では、本当に静かに夜中の散策を行っている。

うすうす気付いてはいるだろう弥生母ちゃんに、今以上の心配は掛けられないのだ。

そんな竜也兄は三人悪にとって目の前にある目標であり、憧れの存在である。

彼等にとっても良き理解者である反面、彼らが少なからず違つ世界

の扉を開けてしまっていることも知っていて、それに伴う危険に常日頃から心を痛めている。

多くは語らないが、幼いとはいえ、三人悪達が男である以上、一々口を挟まないのが竜也兄である。

今日も今日とて、竜也兄は、夜の散歩を楽しんでいた。

すんだ空気、人気も疎らな夜の町。

「おう、竜也、また散歩か？」

顔なじみの三田村巡査のもとを尋ねる。

三田村巡査は竜也兄を可愛がってくれている人でもある。

彼の夜の散歩を心配しているが、信頼もしており、彼がたまに交番を訪れると職務の手を一旦休めて話し相手になってくれたりする。

「もう二時も過ぎる。帰って寝ろ？」

「はい。」

巡査の前では竜也兄も素直になる。

日頃弟達が彼を相手にちよくちよく遊んでいるのを知っているのもあるのだろう。

てつし達の三田村巡査に対する親愛の情の示し方は少々度が行き過ぎてている。

そのため、巡査にとっては三人悪との遭遇はいつも命がけのようなことになるのだが……。

ふと空を見上げた。

雨雲の向こうの空には星々が輝いているのだろう、しかし、たとえ晴れていたとしても竜也兄のいる場所は繁華街、星は街の明かりで見えることは出来ない。

町外れにあるイラズの森の近くまで行けば星は見えるだろうけど。そんなことを思っていると、夜空を一筋の光が渡っていった。

（流れ星？）

一瞬巡った思いはすぐにかき消した。

繁華街の中を行く人達は、煌く光の筋に全く気付いていない。しかも、少し雨が降ってきたのか、天を仰いでいる人が少なからずいたはずなのに。あんなに大きく目立つ流れ星を自分以外の人が気付いていない。以前、光る筋を見て追った先にあつたのは女の生首だった。関らない方がいいと竜也兄の本能が告げているのに、足が、目がその光を追ってしまっていた。

イラズの森。

その森のすぐ傍にあるイラズ神社。

夜中のイラズの森や神社に近づく者は居ない。

何かが潜むスポットとして有名でもある。

しかし竜也兄は、導かれるように光を追って神社の境内に足を踏み入れていた。

長い石階段を上がり、本殿の前に光が浮かんでいるのを見た。

竜也兄は、思わず太い鳥居に身を隠した。

見つめる先の光の玉は大きくなり、輝きは失われていったが人型をなしていた。

(…女?)

人型をなした元光は、スカートを穿き、長い髪をポニーテールにしていた。

銀色の髪がふわりと風に舞っていた。

「その者、出てきやれ。」

よく響く声だった。

竜也兄は、自分に言われているのだと理解し、鳥居から身を隠すのをやめた。

「なんだ、まだ子供ではないか。」

自分と対して変わらない年齢の娘だった。

とても美しく、この世のものとは思えないほどの輝きを竜也兄は感じた。

「…何者だ？」

娘が細めていた目は、真つ赤だった。

「はて、何のことやろうのう。」

竜也兄は、鋭い眼光を少女に向けた。

「…命が惜しくば、今見たことは忘れるがよい。そなたは頭の良い子供だろう？」

竜也兄のことなど気にしてない風に少女は言う。

そして、ツカツカと歩いてきて竜也兄の横を通り抜けた。

「なんじゃ？」

竜也兄は思わず少女の腕を掴んでいた。

「おい！」

竜也兄の脳裏に浮かんだのは、摩訶不思議なことに足を突っ込んでいる弟達のことだ。

得体の知れない少女がこの上院町に来たとなれば、好奇心旺盛な彼らが関らないわけはない。

「心配は弟達のことかえ？優しいの人の子よ。」

自分の心を読まれたことに竜也兄は一瞬手を離す。

ピリリと痛みが手に走り、さらに距離をとる。

「安心するがよい。我を止めようとする勇氣ある人の子よ。我は人に害なす存在ではない故な。それに……我は人として僅かな時を生きようと決めたのでな。」

霧が消えるように目の前の触れていた少女は消えた。

「さあ、忘れて眠るがよい。子供は寝る時間ゆえな……。よい朝を迎えられるよう祈っておるぞ、子供。」

頭の中に響く声は、静かに消えていく。

竜也兄は目を見開いたけど、そこには何も誰もいなくて。

「あ、あれ？どうして……俺は……ここに？」

首をかしげながら竜也兄はイラス神社を後にした。

UJU

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2859z/>

---

天に舞うは九つの尾っぽ

2011年12月17日01時04分発行